



神聖かまってちゃんとフランシス・コッポラ

やってるうちによく分からなくなる事の勇気

制作費450億円の『地獄の黙示録』(1979)について〈この映画のテーマはなんだ〉と質問をしたら、フランシス・コッポラは《撮っていて途中で分からなくなっちゃった》といった

。

↓

フランス・コッポラは当時の制作費で70億円をつかって『地獄の黙示録』を撮った。それはいまのお金に計算すると450億円ほどにもなるという。



そのような莫大な金額をつかった挙句、監督自身がテーマを分からなくなるなんてこんなばかな、と全人類が思うだろう。

しかし、よく考えてみると、コッポラはいくらでもカッコつけたことを言えたはずである。作品はもう出来ているのだから、それらしいことを後付けでいってもいい。それをしなかったコッポラ。とても信用できる監督だ。

わたしたちは人といるとき何かしらカッコつける。そうじゃなくても、ばかにされないよう気をつける。

たとえばNHKで↓

たとえば、こんな話がある。俳優の柄本明がNHKの番組で小学生に「絶望の授業」をするという企画があった。柄本はひとりのこどもに教室の前に立たせる。

「怖いのと、なんかヒヤーって気持ちになるね。こちらで安心してたのに、急に体が熱くならない？ それから、辰ちゃんは、今、笑ったね。なんで見られると、人は笑うんでしょう。見ているときは仲間がいっぱいいる感じなのに、見られるときは自分だけだよ。」

席から立って教団の前に来て、みんなから見られているのを感じるまでの間、その場面場面でいろんな自分に出会うのだ、と柄本は続ける。こどもを前に立たせて、戻らせるその表情や動きをほかのこどもに観察させて解説する。自分の席に戻ったこどもに「急に楽になったでしょ」という。こう続ける。「人は見られると、恥ずかしいのと同時に、他の人に嫌われたくないという気持ちにもなるね。みんなも自分のことを人によく見せたいでしょ」。

↓

さらに柄本は子どもたちに指示する。3人、4人と、前に出てくる子どもをどんどん増やしていった。席に残っているほうが全体の3分の1、4分の1となると、それまで恥ずかしそうにしたり不安があったりしてた前に立ってる子どもたちの方が逆にどんどん気が楽になっていく。

柄本に名前を呼ばれた子どもが次々と前にでていく。残っている人のほうが少なくなってくる。座っている子どもたちに向かって「不安にならない？」と、柄本は聞く。



↓

さらに呼ばれていくと、ついに残って座っている方は、男の子1人、女の子1人の2人きりになってしまった。

「今、この2人はなにを考えているんだろうね。つぎはどっちが呼ばれるか、とか不安なんだろうね。立場がすっかり逆転しちゃったね」

そして、女の子が呼ばれて、男の子1人っきりになった。その子は「すっきりした。みんなが前にいるので怖くない」と強気な発言をする。柄本は「それじゃあね、みんなで黙って彼をじっと見つめよう。黙ってだよ。それで、少しずつ、彼に近づいていってみよう」と提案するのだった。

↓



柄本はいう。

「たくさんの人に見られると、身体が熱くなったでしょう。それは一体何なんだろうね。見られてるってわかると他の自分が現れるでしょう。どう？ ということは、人間って、だれかとだれかが一緒にいると、そのときすでにもう何かを演技してるってことにならないか？ きみたちが友だちと会っているとき、お母さんといるとき、先生と会うとき、ごますりをしたり、逆に、ごますりしないぞって態度をとったりするでしょう。人間って、人と会ったときに必ず何かをしちゃうんだよね」

↓

ロックが好きというのは自意識のかたまりの現れである。「じぶんこそはこのバンドを一番理解しているんだ！」「この歌はわたしのために歌ってくれてる！」「他のやつらはぜんぜんちがうように理解している！」という意識を発動するのがボンクラだ。

柄本明が教えてくれたことは、自分の一面が発動できるのは外部がいてこそということでもある。

ボンクラくそやろうがたとえば、「この曲を理解してるのはわたしである！」という自意識を発動させることがある。そのとき、いつもいつも負けっぱなしだけど誰にもこれだけは犯させやしない！という謎の強気がでる。



その謎の全能感は「これだ！」という曲があって、さらにそれが全く違うふうに人が評価してるという外部の要因があってはじめて発動するものだ。90年代エヴァンゲリオンがオタクに与えた影響は大きく、いつもいつも弱気な人間がエヴァに関しては「あ？いま、なんて言った？ぶっころすぞこらあ！！」……と心でいつも唱えていたという（当時は「エヴァ」なんていう単語は教室でぜったいに避けるべきことばであり、うっかり出すとイジメられ、ハブられのワードである）。じっさいに手を上げないのがわれわれである！



ボンクラは人間嫌いの人間好きだ。人間好きの人間嫌いといってもいい。とってもめんどくさい人種である。右といえば、左。左といえば、右である。これを自覚しないまま突っ走れるならば幸福なのだが、ボンクラはナイーブだ。自分にある程度は、本を読んだりロックを聴いてない人種よりは、すこしはまともである。

たとえば、2014春に全国公開されたヒュー・ジャックマン主演の映画『プリズナーズ』では自身を善人だと思っている人間がどれだけいかれてるかが読み込める。われわれボンクラが自分がちょっと頭おかしいかもしれないと自覚してるだけマシな人間だと思えることができる映画だった。

↓

神聖かまってちゃんは自身を飾らない。カッコはつけるかもしれないが、あくまで自身のダサさを自覚しているのだ。だから信用できる。「ロークンロール！」と叫ぶ若手バンドよりもよっぽど信用できる。



↓

きつとの子もコッポラのように、テーマなんてやってるうちにマジでわからなくなったとか言いそうである。それでいい。「ほんとはあるんだけど、それを説明すると歌詞の意味を限定的にしてしまうからいやだ」とかいう若手のバンドよりよっぽどいい。やってるうちに分からなくなるくらいにやれよと思う。

小さくまとまって洗練されるのはこなしてきたバンドの権利である。しかし、やってるうちよく分からないものになったというのは若者の特権だ。若手バンドはそれをやるべきである。

神聖かまってちゃんの楽曲にはそれが滲みでている。だからどのバンドよりもダイナミズムに溢れているのだ。



うおお←

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ